
聖女物語～～～学園編～～～

キンカラキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

聖女物語～～～学園編～～～

【Zコード】

Z9644M

【作者名】

キンカラキ

【あらすじ】

四宝学園、この学校は異能力者を生み出す聖域であった。

わけありの転校生、神奈千春が異能力者達の目に止まり、四宝学園の真の目的を明かす。

異能力者学園SFドタバババトル

第一章、四宝学園編 第1話鬼の子1

私立四宝大学付属高等学校

大学部、高等部、中等部、初等部、と分かれる、付属学校である。その歴史は長く戦前からすでにその雛形が存在していたらしい。もつともその頃は普通の高校であり、当時の名前も四宝高等学校であつた。

「この四宝高等学校が付属学校になつたのは今から20年ほど前のことであり、その時は3棟も増える校舎の建設工事の請負契約に一波乱あつたと聞く。」

また、その当時、少子化の影響もあり、毎年入学者数が減つてゆき、経営状況もかんばしくなかつた。いつたいそんな状況でどこにそんな大工事をする資金があつたのだろうと、地域住民のほとんどが不思議がついているが、生徒にとつては単なるおもしろ半分の七不思議のひとつになつてゐるだけである。

かくして、20年前から付属化した、元四宝高等学校の成果は上々であるといえた。

「ここら一帯の地域の児童のおよそ6割が私立四宝大学付属学校に入学し、そのおよそ7割が最終学部まで進学していった。」

そして、この大学部、高等部、中等部、初等部の4学部をあわせて地域住民、生徒は「四宝学園」といふ呼んだ。

四宝学園と。

「ここは四宝学園の高等部、1学年の教室である。

いきなりドアが開き男子生徒が両手を挙げて飛び込んできた。

「千春さん、結婚し . . .」

「ドゴッ

無言で、飛んできた鉄拳が顔面に突き刺さり、男子生徒はまるで車にはねられたかのようないで吹き飛んでいた。

千春と呼ばれた女子生徒は心底迷惑そうな顔をして叫んだ。

「あんたねえ、授業中にこっちのクラスに来るなって何度もいってるでしょがあ～、あと名前で呼ぶな」

「神奈さん、授業中ですよ、皆さん真剣に勉強しているんですけどから、またか、といった表情を浮かべていた。

「神奈さん、授業中ですよ、皆さん真剣に勉強しているんですけどから、夫婦漫才も大概にしなさい」

黒板の前で授業をしている、髪を後ろで結んだ女の先生が私に注意をした。クラスのみんなから笑いが流れた。

千春は顔を真っ赤にしながら言った。

「先生、夫婦じやありませんし、付き合つてもいませんし、友達ですらありません。そもそも、私だつて迷惑をしているんです」

しかし先生はまったく聞く耳を持たない、というか、むしろ面白がっているかのような顔で答えた。

「あら～、そうなの？、傍目から見たらまんざらでもないよつて見えるけれどもねえ～、でもいいじゃないのよ、狩矢君、特別優待生なのよ、学校のエリートなのよ、将来有望よ～」

完全にからかっている。千春はいらいらしながら答えた。

「だつて結婚ですよ結婚、私まだ15歳ですし、こいつだつてきっと同じでしょ。結婚なんて出来るわけがないじゃないですか」

「あら～だつたら結婚できる年だつたら結婚してもいいってことなのね～」

クラスのみんなが大笑いした。

しまつた、墓穴を掘つた、なんだか最悪の誤解を生んでしまつたような気がする。

クラスのみんなから笑いものにされてしまつて千春はもうこの場にいることが出来なくなつてしまつた。

「失礼します」

そういうでピクピクしてこの矢の手をひっぱり教室から走り去つていつた。

「不純異性交遊はダメよ～」

怒りに任せて走り去らうとしている時に先生のとじめの一撃が千春の心に突き刺さつた。

ここにちはキンカラキと申します。

聖女物語～世界編～から来ていただいた方、そうでない方もこの小説に立ち寄つていただいてどうもありがとうござります。いや～すみません、聖女物語～世界編～の前書きにも書かれているのですが、こちらの作品は世界編を描こうと思つ前の設定のものです。

やっぱりどうしても書きたくなつてしまつたので、はじめてしました。

世界編に書いたのですがもともとのジャンルは学園ほのぼの超能力バトルだったのですが、もう少し深入りして異種能力者学園SFドタバタバトルにさせていただきました。

さて、世界編では（といつてもまだ全然書いてないけど、構想だけはある～～；）とにかくひたすら悲壮感漂う作品になる予定なのですが、学園編では全体的に明るく、ほのぼのしている展開にさせていただきたいと思っています。

とはいってもまあ、バトルですから、それなりの衝突などもあるわけなのですが・・・

基本的に世界編と、学園編はパラレルワールドと思つていただいて結構でござります。

ですので登場人物、設定、などがかぶるところが多々あるかと思います。

世界編は闇の世界
学園編は光の世界

この両方を連載して行きたいと思っていますので、皆様もしよかつたら見ていてくれるとうれしいです m(—) m

第2話 鬼の子2

風を切るかのように、そう表現するのがふさわしいかのようにな千春は廊下を走り、そしてまるで飛んでいくかのように階段を上つていった。

後ろで引きずられているどこかのバカ男子がドタンバタンと床に叩き付けられてガングンガングンと階段に頭をぶつけていたがそんなことはまったく気にしない。

千春が向かっていたのは屋上だつた、とりあえず人目がつかないところ。そう考えて最初に思いついたのが屋上だつた。

まるで車に乗つているかのように、景色が恐ろしい勢いで移り変わる。これが道路の上であればたいした感情をもつこともなく、少し退屈なくらいに思うだろう。

だが、学校の校舎内でこれが起つているのだ、いうならば、校舎の中を車の制限速度オーバーで走つているようなものだ。いや、むしろジエットコースターといったほうが適切な表現なのかもしれない、常人であれば恐怖で叫びだしているだろう。

だが、千春のとつてはこれは普通のことだった。そう、いつもどおりの慣れたことだ . . .

そして、1階から、屋上に続くドアのある4階まで30秒もかからずにつどり着いた。

屋上に続くドアを開ける、思つたとおり誰もいない、あるのは転落防止用のフェンスと貯水槽だけである、屋上から校庭を見ても体育の授業をしている生徒達がいるだけで、上を見上げて屋上の様子をうかがつている生徒などいるはずもなかつた。

「ふうっ」千春は一息つくことが出来た、勢いに任せてつい教室から出て行つてしまつたが、そのまま教室で笑いものにされているほうがゾッとする。

まつたく、じりじりこんなことになつてしまつたんだろう、私は普通の女の子でいるはずだったのに、そのために特訓をしたのに。すべてはあの時からだ、あんなことが起こらなければ、私は「ぐく平凡などこにでもいる女子高生でいられたはずだったのに。」

身長148センチ、体重38キロの小柄な体型、髪はちょっと赤みがかつた茶色で（生まれつき）肩にかかりそうだから、後ろで結んでいるどこから見ても違和感のない高校生でいられるはずだったのに。

（もしかしたら、私が普通を求めるのはお門違いだったのかなあ）はあ～、と千春は大きくため息をついた。

でも、それでもこの学校から逃げることは出来ない、少なくともこの四宝学園は小学校、中学校の頃と比べれば、楽園だったからだ。

「千春さん、君の愛情表現を全身で受け止めたけど、なぜだか体が痛くてたまらないんだ。申し訳ないけど、立ち上がりせてもらえないかな？」

不意に後ろから男子の声が聞こえてきた。あつ、そういうえば、なぜかつれてきてしまったのを忘れてた。千春は後ろを振り返つてみてみる、あつ、頭が割れて血が噴き出している。

千春はつかんだ腕を無造作に振り上げて、立たせてやつた、うわ！顔が血まみれだ。

「いたいたた」

顔面がかなり壮絶なことなつているのにまつたくもつて緊張感のないセリフを吐きながら狩矢は立ち上がり千春のほうを向いた。

その顔でこっちを見ないでほしい、はつきりいつてかなり怖い。

千春はかなり引き気味で狩矢を見た、身長は大体165センチくらいの中肉中背、黒い髪はセットしているのか寝癖なのかわからないうが前髪の一部が天に向かってピンツと立っている、顔はどちらかというと文化系っぽい顔、あまり頼りがいもなさそうだ。その上普

段はそれなりの顔をしているのに真っ赤に染まつてしまつた顔面のせいでの今ではどこぞのホラー映画に出てきそうな雰囲気になつてしまつてゐる。

「ひどいぢやないか、千春さん、一人きりになるためとはいえ、やり方があつた乱暴だとは思わないかい？」

「誰が一人きりになるためよ、あんたが授業中に乱入してくるから、私はクラスの笑いものぢやないのよ。はつきりいつて迷惑しているんだから、こつちにこないでよ」

狩矢はいかにもまつたく持つて予想外だ、といつた感じの表情をしながら

「えええええ、迷惑だつたの～？だつて僕はてつきり千春さんが照れ隠しで殴つてゐるだけだと思つていたのに」

「そんなわけないでしが、別に私はあんたと、けつ、結婚なんてするつもりはないんだから、付きまとわないでよ」

プリツと千春は赤くなつてそっぽを向いた、狩矢に對して照れているわけではなく結婚という単語を使ったことに対しても照れているのだ。だが、そのことが狩矢に伝わることはなかつた。

「やつぱり照れているんだね千春さん、よつやく僕の愛が伝わつたんだね～」

狩矢は心底うれしそうに両手を挙げながら叫んだ。

「全然ちが～う、つていうかあんたと話してると話が平行線だわ、とにかく授業中だらうと、休み時間だらうとこつちに来るな、近寄るな、帰れ」

ここまでいつたらさすがに狩矢も諦めてくれる、とは思つてはいなかつたが、とにかく、最低でも授業中だけはきてほしくはない。

しかし狩矢は珍しく真剣な顔になつて、千春を見ていた（ただし顔は血まみれ）

「な、何、もしかして傷ついたぢやつたの？」

さすがに言い過ぎちゃつたかな？と千春は思つたが、狩矢が次に出した言葉は千春の予想とはまったく違つことだつた。

「ああ、いや、違つんだ、確か、大事なことを伝えなくちゃいけなくて、それで千春さんの教室に入つていつたんだけど、何だつたかな？」

「なによお」

「ああ、思い出したよ～、そういうえば今日、生徒会で緊急会議を開くから、遅れないでくれって伝えようと思つたんだ」

緊急会議？千春は首をかしげた、千春は生徒会に入つてまだ日が浅い、緊急会議なんて聞きなれない言葉だ。だが、この四宝学園での緊急会議だ、十中八九アレに関する件だらう。

「緊急会議ねえ～、ってあんたそれを伝えにきたのが用事ならなんで教室に入つた第一声がアレなのよ？しかも別に授業中じやなくても休み時間でいいじゃないのよ」

「いやいや、そつちはついでであつて、僕にとつては愛の告白のほうが人生におけるすべての用事の中で最優先事項なのさ～」

ああ、だめだこいつ、はやくなんとかしないと。千春は心底頭を抱えた。

「と、とにかく、あんたのその行動のすべてがものすごく目立つのよ、そしてそれはあんただけじゃなくて巻き込まれていて私も目立つの、だからせめてもう少し静かにしていてよ」

「あれあれ～、千春さん目立つのが嫌なの？」

「当たり前でしじうが～、アレは目立つを通り越してはや見世物よ、私は目立たず、静かに、そして地味に学園生活を送りたいのよ。だからあんたのその非常に人目に付く行動が迷惑なのよ」

だが、狩矢はまったく動じない、まるで自分が正しいかといふかのように反論した。

「だめだよ、そんちがいはまつちやあ、もつと胸を張つて大きく生きようよ」

「チツ

「誰が胸が小さいか！――――」

千春は無造作に狩矢の腕をつかみ、まるでソフトボールを投げるかのようなくに向かつてぶん投げた。

「そんなこといつてない」

叫び声を上げながら、狩矢は、つかまれた腕を中心にくるくると回転しながら「冗談と思えるほど高く、遠くへと飛んでいった。

これがギャグ漫画ならば、空に星のマークが出てキラーンとでも擬音が浮かび消えてしまうのである（うが、これはギャグ漫画でも、ギャグ小説でもない）。

現在の物理法則では大気よりも比重の大きいものは大気に浮かぶことはない、地球の中心に向かつて沈んでゆくのだ（つまり地面に落ちる）。狩矢が大気よりも比重が小さければ悲劇を免れることが出来たのであろうが（その場合は宇宙空間まで飛んでいく可能性もあつた）、残念ながら大気よりも軽い人間はまだ確認されていない。きわめて現実的に狩矢は放物線を描き校庭を越えて校門を少し越えたところで地面にたたきつけられた。

間違いなく生きとはいえないだろう。それどころか人間としての原型を保つていてるのかどうかも怪しい。

狩矢四郎 死亡 享年15歳

第3話 鬼の子3（前書き）

．．．って、んな訳ないない、狩矢は主人公の一人です、主人公の
一人が冒頭でいきなり死んでしまうような物語つて．．．結構ある
かも．．．
そんなわけで第3話スタート、（．．．）ノ

第3話 鬼の子③

ハツ、しまつた、あまりにイライラが募り、しかも気にしていることを言われてしまつたから（言つてない）つい、投げ飛ばしてしまつた。

まあ、狩矢だから心配はないだろう、彼は死なない体質だから（誰にでもやるわけじゃないよ、信じて）。

それよりも問題は、狩矢が校門辺りまで飛んでいつてしまつたということだ。おそらく校庭で授業をしている生徒達が大騒ぎをしているに違いない。

千春はフェンス越しから校庭を覗き込んだ。あつやつぱり狩矢の周りに人だかりが出来てる・・・やばいかも・・・

とはいえ、警察を呼んだり、救急車を呼んだりすることはまずないだろう、狩矢が死なない体质だということは四宝学園のほとんどの人間が知っている。

そう、狩矢は学校でも数人しかいない異能力者だ、そして狩矢の能力は、即死するほどの攻撃を受けても、数分後にはなにごともなかつたかのようによみがえる超絶再生能力。

しかも、身に着けていた衣服まで再生するので、正確に言えば再生能力ではなく、復元能力である。

うらやましい、私もほしい。

そして、私もまた、狩矢と同じく異能力者。

何でも私、神奈千春の家系は数百年に一度、鬼の子が生まれるという言い伝えがある。

そんなこと両親はもちろん、おじいちゃんもおばあちゃんも信じていなかつたが、実際にその鬼の子らしき私が生まれてしまつたのでしようがない。

とはいえる、鬼の子といつても別に頭に角が生えているわけでもな

いし、体が大きいわけでもない（むしろ小柄）

ただ、人間離れをした身体能力を持っているだけ。

しかしこんな細腕のどこにあんな怪力が生まれるのか、いつも疑

問に思う。

でも、この能力のせいで私はいつも孤独になつてしまつていた。小学校も中学校もみんな私を恐れて近づかなかつたからだ。本当は他の子のようにみんなで遊びたかったのに、どうして私だけ他の人と違うんだろう、私はこんな力なんていらない、他の人と同じがいい、私はいつもそう思つていた。

そして、高校生になつて一ヶ月がすぎた頃、両親から話を持ちかけられた。

「四宝学園に転入してみないか？」と

両親が言うにはこの四宝学園は私のように異能の力を持つた子供が集まる特別な学校らしい。そしてそこなら、千春も学園生活を楽しむことが出来るのかもしれない。

正直私は不安だつた、だつて、親と離れて生活するなんて今まで考えたこともなかつたし、それに田舎の地元を出たことがなかつたので、都会の暮らしに慣れることができるかも心配だつた。

でも、当時通つていた高校もやつぱり今までどおりみんなが私を恐れて関わろうとしない、それも当然のこと、だつて私の住んでいたところは超がつくほどの田舎で小学校も中学校も高校もほとんど選択肢がない、つまりほとんどの生徒が顔見知りというわけだから。そんな生活から抜け出したい、その気持ちはずっと前からあつたと思う、だから私は勇気を出して唯一の理解者であつた親元を離れて四宝学園に来たのだ。

うまく四宝学園に転入できた時は期待と同時に不安も一杯だつた、私の正体を知つたらまたみんなに避けられるんじやないかと、みんなにまた恐れられるんじやないかと。

だから私はなるべく力を隠して、普通の人を装おうとしたんだけど、転校初日に事件があり、あっさりとばれてしまつたのだ。

「ううう、ついてない、せっかく地元を離れて四宝学園に転校してきたのに、ここでは能力者であることを隠して、平穏に、静かに学園生活を送ろうと思つていたのに……」

千春は自分の不幸さを恨んだ。……とまあ現実逃避はこのくらいいにしておかないと。

「あああ、しまった、やつちやつたよお～」

狩矢が死ぬわけがないのは知つてゐるけど、いくらなんでもやりすぎた、ひどいことをしてしまった。

「ど、どうしよう。あやまらないと、つていうか、校庭にいる生徒がこいつを見てるよ～」

それはそうである、何しろ、屋上から人が飛んできたのだ。一体何が起こったのか？誰がやつたのか？確認したくなるのが人の常である。

「ど、とりあえずここにいても状況は悪くなる一方だし、もうすぐ授業も終わるし、教室に戻るつ」

千春は逃げるよつに屋上から立ち去つた。

それからの授業は生きた心地がしなかつた、たしか次が6時間目、理科で、プラズマがどうとかいついていたような気がするけど、まったく記憶に残つてない。ついでに言えばクラスの仲間がなにやらひそひそこつちを見て言つていたが、千春にはそれも今はどうでもよかつた。

気がついたら授業も終わり、千春にとつてはもつとも来てほしくない時間、放課後が来てしまつた。

なぜなら、放課後は狩矢が言つていた生徒会の緊急会議である、もちろん狩矢も生徒会役員の一員だ。つまり、嫌でも顔を合わせてしまうことになる。

「一体、どんな顔して顔を合わせればいいのよお～」

千春は生徒会室がある、3階に続く階段を上りながら嘆いたが、

逃げ出すわけにはいかない、しつかりとあやまっておきたいし、会議だつてたぶんアレの件だ、早急に対処しないと大変なことになってしまふかもしない、私のときのよつこ。 . . . とはいえ顔をあわせづらー

千春は狩矢に会わないようになソコソと生徒会室に向かい、時間ぎりぎりになつてから、生徒会室のドアを開けた。すでに生徒会の面子はそろつていた。

第3話 鬼の子3（後書き）

「めんなさい——」

「し、失礼します」

負い目のある千春はおずおずと生徒会室のドアを開けると、「遅いで、千春ちゃん」先輩の注意が出迎えてくれた。

「は、はい、すみません、その、ホームルームが長引いてしまって本当のことといえない千春は軽く嘘をついて生徒会室を見渡した。いつ見ても殺風景な部屋だと思う、広さは普通の教室と同じくらい、廊下側の壁には書類などが収められている棚があり、ほかの教室では黒板があるべきところにはホワイトボードがかけられている。そして、生徒会室の中央には大きな長方形のテーブルがひとつ、イスを囲めば10人くらいは座れそう。

「ほら、こっちはやで、千春ちゃん」

テーブルのあいているイスを進めてくれた。

「あ、はい」

声をかけてくれたのは石原先輩だ、石原アリサ、なぜか関西弁をしゃべる日本人とどこかは知らないけど、外国人の血を引くハーフの人。

その容姿は美人というよりもどちらかというと可愛い系、背中まで届く金髪の髪に、青い瞳、それから口を開くたびに見える八重歯は小悪魔的というよりも活発な印象を与えていた。ちょっとだけ口調はがさつだけど、すごく面倒見がよくて、とっても優しい先輩なのだ。

そしてもちろん彼女も異能力者、何でも彼女は精神操ることができるらしい、精神を乱して失神させたりとか、ごく最近の記憶を消したりすることも出来る。

ほかにも色々と出来るみたいだけど、そのうちにわかるからと教えてくれなかつた。

石原先輩には本当にお世話になつていて、以前私が暴走した時に

止めてくれたりとか、その光景を目撃した生徒の記憶を消してくれたりとかしてくれて、もう、石原先輩には本当に頭が上がらない。

とりあえず私は石原先輩が進めてくれたイスに座る。わー！ 狩矢の正面だ……。気まずい。

しかし狩矢は顔色ひとつ変えることなく、千春のほうに少しだけ視線を向けると、すぐに生徒会長に視線を戻した。

「これで、全員そろいましたね」

みなが見渡せる位置にあるイスに座っていた生徒会長が口を開く。生徒会長、名前は神崎沙代利かんざきさおり、160センチは超えている女性にしては長身で、いかにも大和撫子といった風貌は男子生徒に人気が高い。

その、腰まで届く綺麗な黒い髪はいつ見てもため息が出るくらい美しい。それでいて、決してその容姿に鼻をかけることのない物腰柔らかな性格はまさに清廉潔白といった表現がふさわしい。

その上学校の成績もトップクラス、……なんだか天は2物を与えずつていうのは嘘だと思う。

あと、なぜか彼女だけ、制服が私たちとはちがう。……なんでだろう？

そしてもちろん彼女も異能力者。といつても、私は会長の能力はまだ知らない。

以前石原先輩に聞いたことはあつたけれど、これまたそのうちわかるからといつて詳しいことは教えてくれなかつた。

なんでも石原先輩によるとこの学校でもっとも奇跡級に近い異能の持ち主だという話、……そこまで言つんだつたらもつたいぶらずに教えてくれればいいのに……つていうかどう見ても石原先輩の能力もチート……。

今のところはこの四人が生徒会の役員だ。

本当はあと二人いるらしいけど、とある事情で今は四宝学園には

いない。そして、その一人も何らかの異能力者らしい。

「」まで感づいたかもしれないけど、実は生徒会に入るには条件がある。

それは能力者であるということ。

というよりも能力者は強制的に生徒会に入れられる。だから私も生徒会に入れさせられたという訳。

そして、今は「」一人と先生のうちの何人かを除くと、今、この四宝学園高等部には能力者は四人しかいないということになる。

「さて、皆さんよろしいですか？」

会長が皆に確認をし、皆がうなずいた。

「それでは、今から四宝学園生徒会、緊急会議を始めます」

第4話 生徒会の面々（後書き）

第一章はこの面子で話が進みます。

話が進んでゆけばこの倍くらいの人数になります。

文章が稚拙ですみませんm(—)m

ただいま勉強中ですので、もつとつまくなつたら、見やすく書き換えていきたいと思っていますm(—)m

第5話 事件勃発（前書き）

こつもよつ少し感じます

みんなの表情が強張る。

千春はこんなに真剣な表情になつた生徒会メンバーを見たことがない。

いつもはもつとのほほんと、のんびりとしていて、私は調子に乗つてくる狩矢を殴つたり、飛びかかつてくる狩矢を蹴つ飛ばしたり、そしてそれを、楽しんでいるのか？ あおるかのように石原先輩のエル、そして、会長はまったく我関せず、といわんばかりにいつもの定位置でどこから出してきたのか？ 紅茶をたしなんでいるのが日課だった。

正直私は会長に「イシニナツタラセイトカイノシゴトヲスルンデスカ？」と問い合わせようと思つたのは一度や二度じゃない。

でも、ようやく、生徒会の仕事が始まるんだ。そう思つと、千春は緊張するとともに高揚する気持ちをおさえられずにいた。こうか生徒会の仕事つてこんななんだつたつけ？ なんとか私のイメージと違う気が……

「さて、なにをどう話したらいいものでしょ？ つか？」

とか思つていたら会長が人差し指を口に当たしてこきなり口をつむんだ。

「なんやそれ、ショッパンからつまづいてどうすんねん、って言うか会議なんやろ？ しかも緊急なんやろ？ 異能関連のこととかやつんかいな？」

石原先輩が文句を言つ。……正直私も文句を言いたい……なんだか緊張が一気に冷めてしまった。

それを聞いた会長はうれしそうに胸の前で両手をパンツつと叩いて。

「そりそり、それなんです、実は異能関連のことなんですよ」

「いや、そんなことは皆予測しつるひぢゅーねん、ええから早く本題入つたつてや」

「そうですよ、会長、そろそろ暗くなつてきます。早く進めないと夜中になつてしましますよ」

と、ここで今まで大人しくしていた狩矢も参戦した。 . . . あれ? なんだか狩矢がまともだ . . .

「つづり、千春さん、皆さんのこの仕打ちをどう思いますか?」手の甲を田元に当ててさめざめと泣く会長を見て、千春の会長=完璧超人のイメージがガラガラと音を立てて崩れてゆくのを感じた。「ええからはよせんかい」

石原先輩がきた。

「は、はい、すみませんでした」

あれ? どつちが会長だったつけ?

「ほん、えー、石原さんが言つたように今回の会議は異能力者に関することです」

よつやく進みはじめた会議の内容に今度こそ皆の表情が引き締まつた。

「今回は高等部の生徒ではなく、中等部の生徒なのですが、ある生

徒に異能力の覚醒の兆候があると、先生から連絡を受けました」

皆の顔にさらに緊張が走つた。

「何年何組の生徒ですか? その生徒の名前は?」 とここで狩矢。

「学年は2年生のC組の生徒、名前は遠藤真奈さんと言います」 とここでつい私は声を上げてしまつた。

「真奈? 女子生徒なんですか?」

「そのとおりです、千春さん、もしかしてお知り合いでですか?」

「あ、いえ、知り合いかではないです」

真奈という名前には全然心当たりがない。 ただ、ほんの2週間ほど前も私が学校で騒ぎを起こしてしまつたばかりだ。あの時の記憶と恐怖は今でも鮮明に残つてゐる。 その真奈という女子生徒もきっと

と今、多大な不安にとらえられているはず、力になつてあげたい、
能力が暴走する前になんとしてでも止めてあげたい。私のように手
遅れになつてしまふ前に・・・同じ立場として。

「千春さん、よろしいですか？」

「は、はい、すみませんでした」

「では続けます、彼女に関してはまだ、わかっていないことが多い
のです、なにぶん今日起こつたことですので」

「じゃあ、能力とかもまだわかつてへんの？勘違いとかあらへんの
？」と石原先輩が至極当然な疑問を述べる。

「はい、まだ詳しいことはなにもわかつていません、ただ、先生の
話によれば、授業中に近くにいた生徒が急に気を失つた、との話で
すが」

「なんやそれ、そんなもん、貧血かなんかで倒れたんやないんか？
授業中に体調不良になる奴なんてそれほど珍しいもんやないで」

「石原さんの言つとおりですね、ですがそれが複数の生徒が同時に
気を失つた、となればどうでしょう？」

「あ～、めつたにないかもな、というかまずないやうな～」

「そのとおり、まずないことだと思います、よつて、彼女は異能力
者になる兆候が現れたと見てまず間違いないと思います」

「ちょっと待つてください」狩矢が反論した。「その気絶した生徒
にもその時の状況などを聞いたのですか？ほかの可能性は考えられ
ませんか？まだ彼女が異能力者だと決め付けるのは早いのではない
ですか？」

狩矢の反論は正しいといえる。良くも悪くもこの学校では異能力
者は特別な存在だ。ある意味生徒達のあこがれでもあり、また、う
とましい存在でもある。

特にまだコントロールもままならない初期の段階ではそれこそ恐
怖の対象でしかない。

つまり私たちは彼女にこう言わなくてはいけないのだ。・・・明

日から人に会うな、特別教室にこもりなさい。

もちろん特別教室にこもつたら人に会うことはおろか、しばらく家に帰ることも出来ない。

そして、特別教室にこもつた時点で彼女は能力者だと全校生徒に宣伝してしまったようなのだ。たとえそうでなくとも、彼女のクラスには伝わってしまうだろう、何しろすでに被害者がいるのだから。そこまでして、実は私たち生徒会の勘違いでした。では、私たち生徒会の名譽が傷つくだけではなく、彼女自身の人間関係にも大きな影響を及ぼしてしまったことは想像に難くない。（もちろん悪い意味で）

よつて、能力者だと決め付けることは最終的な結論であつて、まではそれ以外のあらゆる可能性を考察するべきなのだ。．．．だが

「確かに、狩矢さんのいうとおり決め付けるのには早いのかもしれません、ですが、すでにもう被害者と思われる方は出てしまっているのです。それにその方たちはいまだに目を覚ましていません。彼女の能力は相当危険なものであると思われます。

彼女にとつて異能力者のレッテルを貼られることは相当の苦痛なのかも知れませんが、でも、しばらく様子見をして、万が一彼女のクラスメイトを傷つけてしまう事態になれば、彼女はそれ以上に傷つくことになるとおもいます」

その気持ちはよくわかる、私も異能力者であること過去の事件がゆえにクラスでは浮いた存在になってしまっていたし、今でもそうだから。だからこそ、絶対に助けたい。

「わかりました」狩矢がうなだれて折れた。

「ほなきまりやな、じやあ早速その真奈ちゃんに会いに行こうやないか」

石原先輩が時間が惜しいといわんばかりに早速席を立とつとしたその時。

「あ、待つてください」会長が石原先輩を制した。

「なんや、まだなにがあるんかいな？」

「はい、実はまだ、もうひとつ議題があるんです」
会長は少し頭を下げて言った。

「実は今回の会議は本来は」あらが本題なのです「
会長の言葉に皆の顔が最初よりもさらに強張った

第5話 事件勃発（後書き）

ようやくストーリーが進みだしました。

第6話 異能者達の事情（前書き）

世界観説明タイムです

第6話 異能者達の事情

「えーと、えーと」

なにやら会長が困惑している。

「またかいな、会長はほんまに「こういう場が苦手やなあ」

石原先輩がやれやれといった表情でため息をついた。・・・えつ、

じゃあ最初のあればボケたんじやなくて素だったのか。

「んで何や、本題つて、能力者のことではないか？」

「ええ、ちょっと違うんです」

「ほんなら～、今日ここに先生がおらん」とと関係あるん?・

会長の表情がパツと明るくなつた。

「そつなんです、実はそつなんですよ」

「やっぱそつなんか、いつもこついう会議は先生がしきりとるもん

な。慣れない会長が仕切るのはおかしいとおもつとつたわ」

石原先輩の表情が少しいぶかつた

「それで、なんで先生がいないんや、私たちに伝えることもなく任

務にでたんか? そんなに大仕事なん?」

会長の表情が真剣になつた。

「ええ、実は、これも本日明らかになつたことなのですが、この町、特殊指定区域に「ネメシス」が潜入したとの情報が入つたのです」

「ネメシスやとう!」石原先輩が驚いたように大声を上げた。

はて? ネメシス? 聞いたことがない。

「会長、ネメシスって何ですか?」という訳で聞いてみるとこじ

た。

「ああ、千春さんはまだ、異能力者になつて日が浅いから聞いたこ

とがなかつたのですね。ネメシスというのは、ええと」

「ネメシスというのは」ここで狩矢が話に参加してきた。「能力者不当労働開放団体、またの名をネメシスという、彼らはネメシス

の名前のほうを好んで使っているみたいなんだけれどね

「能力者不当労働開放団体？」なんかわかりやすいようなわかりに

くいような。

「そう、狩矢さんの言うとおりです。千春さんも知つてのとおり、私たち異能力者は政府によつて管理されていますが . . .」

「えつ！ そうなんですか？」いえ、今初めて聞きました。（汗）

「なんや、千春ちゃん、知らんかったんか？」狩矢、千春ちゃんに説明しどけつて言つておいたやないか

「え、僕ですか？ いえ、聞いてないですけど . . .」

「なにいつとんのや、確かに言つておい . . . た . . . で . . . あ

つ！」

石原先輩が思い出したかのように声を上げた。

「すまんすまん、狩矢、そういえば、あの後私、狩矢の記憶を消してしまつていたな、そら覚えてないのも無理ないわ」

会長がおでこに手を置いてはあ、とため息をついているのが見える。

「仕方がないですね、あまり時間がないのでかいつまんで説明しますが、先ほども説明しましたが、この国で生まれたほとんどの異能者、とりわけ、この町、特殊指定区域で生まれた異能力者は、政府によつて管理されています。

詳しく述べならば、内閣府所属の、特殊労働庁によつて管理され、私たちも四宝学園大学部を卒業すれば、その特殊労働庁に在籍することになり、そこで個々人の能力に適した労働を与えられることになるのです

「たとえば、私やつたら精神を操る能力をいかして、心療内科医とかな」石原先輩が得意な顔で答える。

「ですが、能力者の絶対数は少なく、その上、異能のことを一般市民に知られてはいけないので表立つた行動を取ることも出来ないです。

「え、それは、どうしてですか？」

「国際法で決まっているからです」

だらう？

「たとえばやな、千春ちゃん、私みたいに精神を操る能力でどつかの病院で心理カウンセラーになつたとするやろ、そうしたらどうな

「」と思ふ

—その病院は精神病患者で繁盛するでしょうね。

「そのとおりやな、でも、それだけやないで、今の情報社会をなめたらあかん、そんな簡単に病気を直してしまえる奇跡の医者が実在すると知られたら、あつという間に日本中、いや、世界中に知れ渡つてまう。」

そうなりや私は大忙しや、でもそれだけならまだいいねん、問題

なのは、ほかのお医者さんが商売上がつたりや、今のカウンセリン
グだって試行錯誤の上に築かれてきたもんや、それを異能の力で簡
単に解決しました、では今後さらに発展していく技術も停滞してし
まつ。

異能の力は科学技術の発展を妨げてしまう恐れがあるつちゅうことや、それは私の力だけではないで

石原先輩が得意げに語る。

矢も參戦。

「石原さん、狩矢さんの言うとおりです、ですから、異能の力は一般に知られてはならない、これは第一次世界大戦前に世界各国で取り決められた国際条約なのです。

もしもこれを破つてしまえば世界各国からのバッシングはもうろん、経済制裁の措置すら取られかねないのです」

なるほど、みんなの言つてこむことはよくわかつた、でも、ひとつに落ちない点が . . .

「あれ？でも、この四宝学園の人間には異能のことを知られていませんか？」

「ああ、それはですね・・・」

「それはやな」石原先輩が会長の話に割り込んできた。・・・あつなんか会長ちよつとくやしそうな顔してゐる。

「特殊指定区域に住んどる人間は例外つちゅうことや、そこに住んじる奴に隠し切ることは不可能やからな、なんせ黙つても異能に遭遇してしまつからな」

「え、それは何ですか？そういうえば、今まで聞いてなかつたんですけど、どうして四宝学園の人間から異能力者が現れるんですか？」いまさらながらの質問だ、私はてつきり四宝学園に異能力者が集まるものだと思つていたけど、さつきの話から察するに、四宝学園そのものが異能力者を生み出しているみたいだ。

「ああ、それに関してはまずは特殊指定区域が何か？って話からせなあかんけど、今回は時間が惜しいからばぶくで、まあ、そのうち教えたるわ。

まあとにかく、ようは世間一般に認知されなければいいねん、異能に関しては、この特殊指定区域外のほとんどの人間は知つてゐるけれど認めてはいないんや、千春ちゃんも一度くらいは見たことがあるやろ？たとえばテレビ番組の超能力特集とか、心霊特集とかな

「ゆ、幽霊は苦手です」・・・ブルブル

「なんや千春ちゃん可愛じことがあるな、ともかくああこいつ番組の9割は嘘つぱちでできるんや」

「きゅ、9割ですか？」

「ああ、そんで残りの1割は本物がいかにも嘘つぱちじく見せているんや」

「はあ」

「たとえば手品とかやな、ほんまはタネもしかけもないのに手品つてこつ名前を用いただけでトリックがあるつて思い込んでしまつや

「でも、どうしてそんなことをするんですか？」

「人間っていうのはおもしろいもんでな、あいまいなもんでも、な
いって否定すると逆に怪しんで調査したくなるもんなんや、じゃあ
逆にあるつていうと今度はどうしてその力が自分には使つことが出
来ないのか不満がる、だから世間にはな、あるかもしない、って
思わせておいておいたほうがええんや。

あるかもしないつていうグレーゾーンをたもつておけば人間に
つかは科学が解明してくれるかもしないつてそういう心理が生
まれるもんなんや。

つまりは未来任せにして今はそういうものはないけど、いつかは
超能力みたいなものが解明されて自分にも使うことが出来るようにな
るのかもしね、あるいは幽霊の原理がいつかわかるのかもし
れない、けどそれは今ではない、そういう考え方になるんや
「なるほど、でも、じゃあマスコミは政府の手先なんですか」

「そのとおりや、マスコミも政府の依頼を受けてそういう番組を作
つているんや、何しろそういうことはマスコミの得意分野やからな
ついでに言えば今日までの情報社会を作り出したのも政府や、情報
が多様化すればするほどあいまいにしやすくなるからな、インター
ネットなんて実は国家間の秘密取引の上で生み出された技術やつて
うわもあるくらいやで」

「石原さん、石原さん、話がずれときてますよ」会長が石原先輩
を制した

「あ、ああ、すまんすまん、とにかく、異能のことが世間に浸透す
ることは今の段階ではまずないつていうことや、ためしに千春ちゃん
人通りの多いところで私は超能力者だつて叫んで、パフォーマン
スもしてみてみ、それでも通行人は手品かトリックやと思うはずや
で、それだけ国民の情報操作は完璧やつてことや」

「石原さん、そろそろ」会長が石原先輩をうながす

「ああ、そろそろネメシスの話に戻ろうか。ほな、今度は会長たの

むわ

「え、私ですか？」

急な指名に会長は戸惑つているようだ

「ああ、私はもうしゃべりすぎて疲れてもうた、それにネメシスのことに関する話題は会長のほうが詳しいと思つてな」

先ほど、話を横取りしてしまったのを気にしているのかな？やつぱり石原先輩は気が利く人だと思つ。

「わかりました、ネメシスのことは私が説明します」

第6話 異能者達の事情（後書き）

なかなかバトルがはじまりませんね
みなさん退屈してしまつていたらすみません（；；；）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9644m/>

聖女物語～～～学園編～～～

2010年10月8日14時14分発行